**Chapter 1 : 珍しい正統派の英雄、お姫様、そして暴君** Part 1

**月光の谷の影**

ヴェイルの空気は、灰と沈黙で満ちていた。

**エーフィ**は黒曜石の蔓でできた檻の中に動かず横たわり、首に巻かれた抑制バンドのせいでそのサイコパワーはかすかに揺れているだけだった。廃れた神殿の片隅には月光さえ届かず、**バンギラス**はまるで玉座を奪われた王のように歩き回っていた。

「感謝するべきだぞ。」と、彼は砂利が擦れるような声で唸った。「選ばれることを懇願する者も多いんだ。だが——俺は、今のところは我慢してやる。」

**エーフィ**は微動だにせず、その視線を彼に向けた。「**ブラッキー**は私を見つけるわ。」疲れ切った声で、彼女はささやいた。「そして、彼が来たら——」

**バンギラス**の笑いが、神殿の石を揺らした。

－－－

遥か離れた崖の上で、**ブラッキー**は砕けた断崖に立ち、長時間たどってきた匂いの痕跡を目を細めて追っていた。その体のリング模様が怒りに反応してかすかに光っていた。隣では、**ピカチュウ**がまばたきをしながら、退屈そうに、そしてやや苛立たしげに見ていた。

「これのために俺を引きずり出したのかよ？」と**ピカチュウ**はつぶやいた。「今夜は予定があったんだぞ。呪われた土地でお前の恋愛ドラマを追いかける予定じゃなかった。」

**ブラッキー**は彼の方を見ずに言った。「僕に借りがあったよな？」

**ピカチュウ**はうめいた。「借りがあったのは認める。でもそれ、死ぬ覚悟のことじゃねぇからな。」

－－－

**第二章：廃神殿の残響**

神殿の入り口は沈黙に包まれ、ねじれた茨が生い茂り、粗野なルーンが刻まれていた。長らく無視されてきた警告だった。

薄暗い中、ブラッキーのリングが淡く光を放ち、影の間をすり抜けるように進んでいく。その後ろをピカチュウが渋々ついていき、足元の石の軋みにあわせて尾をピクリと動かした。

「で、作戦は？」ピカチュウが小声で尋ねる。「突っ込んで、“彼女を返せ！”って叫んで、でかい山男に潰されんのか？」

ブラッキーは答えなかった。

「…作戦なんてねぇんだろ」ピカチュウがぼそりとつぶやいた。

「目的はある。」

「ちっ、出たよ。復讐モードかよ。」ピカチュウの毛皮にバチッと静電気が走った。

－－－

神殿の奥深くで、エーフィがわずかに身じろぎし、微かな音に耳をそばだてた。バンギラスは石の祭壇の前に立ち、爪でその縁を苛立たしげに引っかいていた。盗んだ花びらと鋭い結晶で祭壇を飾っていたが、それは魂のない儀式の模倣にすぎなかった。

「俺たちなら完璧になれる…」半ばエーフィに、半ば自分の頭の中の亡霊に語りかけるようにバンギラスは呟いた。「お前は光を知ってる。俺は闇を知ってる。バランスってやつだ。」

エーフィの額の宝石が弱々しく光った。「バランスなんて望んでない。従順さが欲しいだけでしょ。」

－－－

そのとき、神殿がわずかに震えた。

バンギラスが振り返り、鼻を鳴らす。「来たか。」

そして上階の回廊から、ピカチュウが石を砕いて飛び込んできた。空中で叫ぶ。

「やっぱ罠じゃねえか、これ！」

すぐ後に、ブラッキーが影のように飛び込んだ。

「彼女を……返せ。」

－－－

**第三章：神殿の落日**

戦いは雷鳴と怒りのようだった。

ブラッキーが先に動き、音もなくバンギラスの脇腹にシャドーで満ちたイカサマを叩き込む。だがバンギラスはほとんど動じず、即座にカウンター。足元の床からストーンエッジが噴き出し、ブラッキーを壁に叩きつけた。骨の軋む音が響く。

「ブラッキー！」エーフィが絶叫した。目を見開いて恐怖に震える。

ピカチュウが雷鳴のような声で吠えた。「１０まんボルト！」

光線がバンギラスの胸に直撃し、一瞬よろめかせる。空気には焦げた砂とオゾンの匂いが漂った。

だが、バンギラスは笑った。

「チャンスはやったぞ。」低く唸り、猛スピードで突進する。

回避しようとしたピカチュウを、爪が捉えた。一撃。最後の悲鳴。

静寂。

血を流しながら、ブラッキーがエーフィの檻へ這う。鼻先を彼女の額に寄せ、かすれた声で呟いた。

「ごめん… 守れなかった…」

そして、バンギラスが最後のあくのはどうを叩き込み、影が彼を呑み込んだ。

－－－

**第四章：塵の儀式**

エーフィが叫ぶ。サイコパワーが虚しく爆ぜる。

「化け物っ！」

バンギラスは立ち上がり、彼女を祭壇へ引きずっていく。

「奴らは戦うことを選んだ。お前は…生きることを選べ。」

棘で作られた鈍い冠を彼女の頭にかぶせ、一歩下がる。

「この瞬間を忘れるな。世界が運命に屈した日のことを。」

－－－

だが、崩れかけた壁の上から、誰にも気づかれずにブリッスル（ハピナス）が見下ろしていた。かつての侍女。慈悲を語ったことで見捨てられた者。

彼女の手には一枚の羽があった。あの残酷さの前の、優しさの時代に贈られたもの。

「もう…いいでしょう…」羽を月明かりにかざし、震える声で囁いた。

「…どうか…聞いてください…」

突如、風が神殿を駆け抜ける。

空が、金と炎で裂けた。

ホウオウが降臨する。

－－－

**第五章：不死鳥の再誕**

バンギラスが振り向いた時には、もう遅かった。

ホウオウの翼から聖なる光が放たれ、生命が蘇る。神殿全体がその神力に震え、ブラッキーの体に金の炎が灯る。傷が見る間に癒えていく。

ピカチュウも目を覚まし、呆然とした顔でしばらく固まったのち、一言も発さずに森へ逃げていった。

ブラッキーは立ち上がり、燻る金の光を纏ったままホウオウを見上げる。

「なぜ…？」

ブリッスルが前に出た。

「彼女があなたを愛していたから。そして…誰かが、思いやらねばならなかったから。」

ブラッキーは彼女を見つめ、泣き続けるエーフィへと視線を移す。

その声は低く、だが揺るぎなかった。

「第二幕だ。」